

ヨブの友人たちの知恵の敗北の予感

「ヨブ記」からの説教 No.4
【聖書箇所】 12章1節～19章29節



主要聖句: 19章25節

「私は知っている。私を贖う方は生きておられ、後の日に、塵の上に立たれることを。」

ベレーシート

●ヨブの軽率なため息混じりの愚痴から端を発したヨブの三人の友人とヨブとの対論は11章で一巡しました。その対論はこれからも継続していきます。12章から第二回目の対論がはじまります。対論によってますますヨブと三人の友人たちの間に「感情的なもつれ」が生じ、双方に皮肉と悪意が顔をもたげてきます。それは「この三人はヨブに語るのをやめた」と記されている32章1節の前まで続きます。

●今回は12章～19章というとても長い部分を扱います。結論を先に言うならば、ヨブの友人たちの伝統的な知恵が敗北する予感を感じさせる新しい要素が、ヨブの言葉の中に少しずつ見出されるようになります。友人たちの伝統的な知恵とは、「悪者」(神を敬わない者)は必ず衰退する運命にあるというものです。どんなに顔があぶらぎっていても、腰の回りが脂肪でふくらんでいたとしても、その最後には、神が介入して、実は振り落とされ、花は落とされるという考え方です。伝統的な知恵には「悪者」と「苦難」と「罪」が密接に関係しているのです。

●友人の一人ビルダデは、これから語り合い、論じるには、「自分が罪人であることを認めることが前提である」ということを、一方的にヨブに押し付けます。そのことを示す言葉が、「まず悟れ」(「ビーン」(בִּין))という要求です。「まず悟るが良い」(口語訳)、「まず理解せよ」(新共同訳)、「よく考えて」(関根訳)、「素直になれ」(中澤訳)、「正気になれ」(バルバ口訳)、というのが友人の言い分です。その悟るべき内容といえば、「悪人は必ず自滅するという」伝統的な知恵のことです。知恵文学の詩篇や箴言、また歴史書には、「悪人たち」(「レシャーイーム」(רְשָׁעִים))がたとえ一時繁栄を誇り、力を持ち、脂ぎっていたとしても、やがて必ず自滅するという神学があります。それが大前提なのです。しかし「ヨブ記」の場合にはそうした神学は当てはまらないのです。ヨブの友人たちはそのことが分かりません。皮肉にも、「まず悟るがよい」ということばは、そのままそっくり、そのことばを語った友人たちに必要なのです。

●伝統的な知恵を揺さぶる新しい知恵の萌芽を、閃光のような啓示の光を、特に14章～19章に見出すことができます。「神の痛みの神学」を著した日本の神学者であった北森嘉蔵師(1998年9月召天)は、ヨブ記の構造を「富士山型」に捉え、42章からなるヨブ記のクライマックスを16～19章としています。しかし、伝統的な知恵が敗北する萌芽を14章、16章、19章に見出すことができます。その萌芽を今回、順次、取り上げてみたいと思います。



1. 伝統的な知恵に対するヨブの反論(12～14章)

(1) 「あなたがたが死ぬと、知恵も共に死ぬ」という皮肉

●三人の友人たちは、ヨブに対してなんら同情することもなく、ヨブの苦難を罪のしるしであるとして得意になって語っていることに対して、ヨブは怒りを秘めた皮肉を語っています。特に、12章2節のヨブの言葉はかなりきつい皮肉です。それは「あなたがたが死ぬと、知恵も共に死ぬ」(新改訳)という表現です。この表現は、確かにあなたがたの言い分は模範的ではあるが、三人の友人たちがヨブに悟らせようとしている応報思想の知恵は、あなたがたが死ぬとそれで終わってしまうような程度の陳腐な知恵だと言っているのです。そのようなレベルの知恵はヨブも十分にわきまえているからです。苦しんだことのない者に対するヨブの強烈な怒りが「あなたがたが死ぬと、知恵も共に死ぬ」ということばに込められています。

●13章でもヨブの友人たちに対する皮肉的表現は続きます。「能なしの医者」もそのひとつ(これを中澤氏は「藪医者」と訳す)です。ヨブは友人たちに「黙って」ほしい、そして自分が言うことを「聞いてほしい」、自分の言い分に「耳を傾けてほしい」と繰り返し懇願しています。

●ヨブの独白と神への問いかけが交錯する中で、14章では預言的啓示の小さな光が差し込んでいます。その前に、14章に見られる特異な語彙があります。それは「人」、あるいは「人間」という言葉です。注目すべきことに、一つの章の中に旧約で使われている「人」に関するすべての語彙が使われているのです。



- ①「アードーム」(אָדָם)
- ②「イーシュ」(אִישׁ)
- ③「エノーシュ」(אָנוּשׁ)
- ④「ゲヴェル」(גִּבּוֹר)

●旧約のすべての「人」に関する語彙のすべてがこの14章の中で使われています。その事実は、明らかに、ヨブが人間の弱さ、はかなさ、汚れ、そして死について関心を持っていることを示しています。自分の潔白さに終始してきたヨブがここで人間そのものに関心が移っていることが分かります。そうした問いの中に、「人が死ぬと、生き返るでしょうか。」という問いかけが登場するのです。

(2) 14章 14節の解釈

【新改訳】人が死ぬと、生き返るでしょうか。私の苦役の日の限り、**私の代わりに者が**来るまで待ちましょう。
【口語訳】人がもし死ねば、また生きるでしょうか。わたしはわが服役の諸日の間、**わが解放**の来るまで待つでしょう。
【新共同訳】人は死んでしまえば／もう生きなくてもよいのです。苦役のようなわたしの人生ですから**交替の時**が来るのをわたしは待ち望んでいます。

●太字になっている箇所へのヘブル語は名詞の「ハリーファー」(הַלִּיפָּה)の単数です。この名詞は、「変わること」「変化」「取り替え」「交換」「交替」「晴れ着」「救い」「解放」を意味し、古いものを新しいものに換えることを表わします。ちなみに「ハリーファー」(הַלִּיפָּה)の動詞は「ハーフ」(הִלִּיף)です。なんとこの「ハ

ーラフ)に「貫く」「刺し通す」という意味があるというのは驚きです。

●それぞれの訳を総合してみると、「人は死ぬと生き返ることができるのか」という問いかけと、「私の代わりにの者」が来ることと密接な関係があるということです。ここに預言的啓示があります。しかも、「私の代わりにの者」「交代の者」が来るときが「私の解放の日(時)」となるニュアンスです。そのときが来るまで、「私は待ちましょう」につながっています。ここでの「待つ」という動詞は「ヤーハル」(וַיִּחַל)。この動詞は、将来なされる神の善を信じることで今日を生き抜く力をもたらすような待ち望みを意味します。「私の代わりにの者」「私の交代の者」は、14章に登場する「私の証人」「私を保証してくださる方」、19章25節の「私を贖う方」を指し示しているようにもみえます。いずれもすべて単数形として表わされています。

2. 「私の証人」「私を保証してくださる方」とは

(1) 友人たちの煩わしい慰め

●ヨブはエリファズのことばを聞いて、「あなたがたはみな、煩わしい慰め手だ」(16:2)と言っています。なぜなら、友人たちはヨブのいうことに一切耳を傾けることなく、また、ヨブの苦しみの思いに寄り添うこともなく、興奮しながら、売り言葉に買い言葉で、ヨブの苦しみの原因について答えようとしているからです。それはヨブにとって、「むなしいことば」(原語は「風の言葉」)のなにものでもありませんでした。

(2) 孤立無援の中でのヨブの一縷の望み

●本来、支えられなければ生きていくことのできない存在として神に造られた者が、全くつかまるところのない無援状態です。それは暗やみの世界です。16章20節で「私の友は私をあざけります。」神も自分に対してまるで敵であるかのような存在としてかかわっています。これはまさにもっとも暗い闇と言えます。ところが、そのように追い詰められたヨブが、「しかし、私の目は神に向かって涙を流します」と言って、神に一縷の望みを抱いているのです。

【新改訳改訂第3版】

16:19 今でも天には、**私の証人**がおられます。**私を保証してくださる方**は高い所におられます。

16:20 私の友は私をあざけります。しかし、私の目は神に向かって涙を流します。

16:21 その方が、人のために神にとりなしをしてくださいますように。人の子がその友のために。

17:3 どうか、**私を保証する者**をあなたのそばにおいでください。

●これは、完全に追い詰められた者が最後の望みとして発したことばであり、きわめて不思議な発言なのです。四方が完全にふさがれていても、上は開いていると言われます。しかし、ヨブは17章12節において、「夜は昼に換えられ、やみから光が近づく」と言われるけれども、理不尽な悩み、不条理な悩みの叫びの中で、自分にはそのような望みはどこにもないとも言っているのです。この倒錯した思いがヨブの中うごめいているのです。



3. 「私は知っている」(ヤーダティ、יָדָעְתִּי)——「私を贖う方を」

●ヨブは自分に罪がないことを確信しているので、神の方が自分に非道なふるまいをして、自分の周囲に苦難の砦を張り巡らしているのだと訴えています。「それは不法だ」と神に叫んでも答えはなく、救いを求めても正しくさばいてもらえず、理由もなく、神がヨブに対して怒りを燃やし、敵となっているとヨブは感じているのです。

●しかも、ヨブは神が自分の天幕の周囲に陣を敷いておられるのを、自分の近親者たちの態度によって感じています。19章の13～19節にはその精神的な苦痛を描写しています。つまり、ヨブの近親者たちのすべて(兄弟たち、知人、親族、親しい友、家に寄留している者、しもべ、妻や身内の者、幼子、親しい仲間、愛していた人々)は、ヨブを「遠ざけ」「離れ行き」「忘れ」「いやがり」「嫌い」「さげすみ」「言い逆らい」「そむく」という仕打ちを与えました。ヨブは近親者のすべてから嫌われ、そむき去られてしまったのです。

●満身創痍のヨブ、四面楚歌的状况に立たされているヨブ。本来ならば、かかわりの中にしか生きられないように造られた人間が、完全にそのかかわりを失ってしまったとすれば、それはある意味で「死」です。ヨブはまさにその「死」の中にいると言えます。ところが、そのような状況の中にあっても、ヨブの口から不思議なことばが出て来るのです。

【新改訳改訂第3版】ヨブ記 19章 23～24節

- 23 ああ、今、できれば、私のことばが書き留められればよいのに。
ああ、書き物に刻まれればよいのに。
24 鉄の筆と鉛とによって、いつまでも岩に刻みつけられたい。

●すでにヨブの最も親しくしていた者たちが背き去って行ったことを強く意識していたヨブは、自分の言葉が書き留められ、碑文として永久に岩に刻み付けられることを願っています。その内容が25～27節に記されていることばなのです。「私は知っている」(「ヤーダティー」יָדָעְתִּי)というフレーズで始まる有名なことばですが、実は解釈の難解な箇所でもあります。

ヨブ記 19章 25～27節

- 25 私は知っている。私を贖う方は生きておられ、後の日に、ちりの上に立たれることを。
26 私の皮が、このようにはぎとられて後、私は、私の肉から神を見る。
27 この方を私は自分自身で見ると。私の目がこれを見る。ほかの者の目ではない。
私の内なる思いは私のうちで絶え入るばかりだ。

(1) 「私は知っている」というフレーズ

このフレーズはこれまでに3回あります。その流れを綴ってみましょう。

① 9章28節

「私は知っています。あなたは、私を罪のない者とはして下さりません。」

—ヨブの独白的部分において、神が自分を無実とは考えておられないのだという一種の諦観的なことばです。

②13章18節

「今、私は訴えを並べたてる。私が義とされることを私は知っている。」

—ところが一転して、自分が無実であることを証明されることを確信しています。

③19章25節

「私は知っている。私を贖う方は生きておられ、後の日に、ちりの上に立たれることを。」

—現実的状况とは逆に、神は決して自分の敵ではなく、「私を贖う方」であるという確信に至ったことばです。

●「贖う方」と訳された原語(名詞)は「ゴーエール」(גֹּאֵל)で、動詞「ガーアル」(גָּאַל)の分詞形です。動詞も名詞も、本来、神のトラーにおける「家族法」(家族福祉法)の領域に属する概念です。経済的に貧しくなり、なんらかの理由で財産を失った者をその近縁者が助けなければならないとする主の定めです。「近縁者」となると、負債を負った者、財産を失った者、病気の者などを、あらゆる困難から救済し、また親族が殺された場合にその者に代わって血の復讐をする者(血讐義務を負う者)を指して「ゴーエール」と言います。近親者の要素の強い語彙と言えます。19章13~19節にヨブが見捨てられた近親者を記しているのは、この「ゴーエール」という意味合いをより強く引き立たせています。

●ヨブがここで「私を贖う方」が活着していることを告白し、その方に期待しているのは、罪の赦しをもたらす身代わりとしての「ゴーエール(贖い主)」ではありません。自分の無実を弁護し、証明してくれるような「ゴーエール」なのです。この視点は重要です。もし新約で言われるような罪の身代わりとして死なれ、私たちが罪と死から救済してくれるような「ゴーエール」と考えるならば、ヨブ記ではなくなってしまう。したがって新約での「贖い」の概念は退けられなければなりません。ヨブ記の「私を贖う方」とは、ヨブの無罪を弁護し、ヨブの正しさを証明してくれるような救済的存在なのです。「私を贖う方は生きておられる」⇒「ゴーアリー・ハーイ」(יְהִי גֹאֵלִי)。「生きておられる」(「ハイ」יְהִי)、つまり、その方は必ず存在するというヨブの確信です。では、その「生きておられる方」とはいったい誰なのでしょう。

●ちなみに、16章19節に「今でも天には、私の証人がおられます。私を保証して下さる方は高い所におられます。」という告白があります。19節の方は、同義的パラレリズムによって「私の証人」と「私を保証して下さる方」とは同義であることが分かります。それと連動して、19章25節の「私を贖う方」、これらの三つはすべて同義だと考える事ができます。また、9章33節では神とヨブの間に立つ「仲裁者」がいないとされていますが、19章25節の「私を贖う方」とは、まさに神とヨブの間に立つ「仲裁者」だとも考えられます。しかしその方はヨブ記の中では登場しません。いわばヨブ自身の希求的存在です。それゆえ、この希求的存在をメシア(キリスト)と解することに躊躇する注解者もいます。

●しかし、私の見解は、聖書は常に預言的・啓示的であることから、ヨブ記の作者が聖霊の導きの中でメシア的存在の到来を預言したとも言えます。もしそのように解するならば、次に取り上げる 25 節後半の解釈にも当然影響してきます。

(2) 「後の日に、ちりの上に立たれる」とはどういう意味か

●まずは、この箇所をいろいろな聖書の訳で見てみることにします。

【新改訳】 後の日に、ちりの上に立たれる。
【口語訳】 後の日に彼は必ず地の上に立たされる。
【新共同訳】 ついには塵の上に立たれるであろう。
【中澤訳】 最後にわたしは塵の上に起き上る。
【関根訳】 最後に彼は塵の上に立たれるであろう。
【バレルバロ訳】 仇打つものはちりの上に立ち上がるのだ・・・
【尾山訳】 終りの日に、この地上に立たれるということ。

●上記の箇所を観察してみると、以下ようになります。

①「**後の日に**」が、「ついには」「最後に」「終わりの日」とも訳されています。原語は「アハローン」(אַהֲרֹן)で形容詞ですが、この節の主語(「私を贖う方」)にかかる形容詞句と考えるならば、「後に来る者は、最後の者は」という意味にもなり得ます。

②その者が「**塵の上に立つ**」とはどういうことでしょうか。「塵」(ちり)と訳された「アーファール」(עָפָר)は「地」とも訳されます。しかし、ヨブが語ったことばの中に次のようなことばがあります。「15 どこになお、わたしの希望があるのか。誰がわたしに希望を見せてくれるのか。16 それはことごとく陰府に落ちた。すべては塵(「アーファール」(עָפָר))の上に横たわっている。」(新共同訳、17 章 15～16 節)。ちなみに、14 章 13 節でヨブは、「どうか、わたしを陰府に隠してください。あなたの怒りがやむときまでわたしを覆い隠してください。しかし、時を定めてください。わたしを思い起こす時を」(新共同訳)という希望を述べています。しかし「陰府」はすべての希望が絶たれるところです。それゆえ、同義的並行法によって(17:15～16)「陰府」を「塵」と考えるならば、「塵の上に立つ」とは、神以外には考えられない常識を超えた行動と言えます。

③「立たれる、立ち上る、起き上がる」と訳されたヘブル動詞は、単に「立つ」という意味の「アーマド」(אָמַד)ではなく、「クーム」(קוּם)という動詞が使われています。「クーム」はギリシア語の「アニステーミ」(ανιστημι)として訳される動詞であり、十分に死からのよみがえりを予感させる動詞だと言えます。

3. ヨブの絶え入るばかりの思い

●19章 26～27節に目を移したいと思います。

【新改訳改訂第3版】

26 私の皮が、このようにはぎとられて後、私は、私の肉から神を見る。

27 この方を私は自分自身で見る。私の目がこれを見る。ほかの者の目ではない。私の内なる思いは私のうちで絶え入るばかりだ。

【新共同訳】

26 この皮膚が損なわれようとも／この身をもって／わたしは神を仰ぎ見るであろう。

27 このわたしが仰ぎ見る／ほかならぬこの目で見ると。腹の底から焦がれ、はらわたは絶え入る

【口語訳】

26 わたしの皮がこのように滅ぼされたのち、／わたしは肉を離れて神を見るであろう。

27 しかもわたしの味方として見るであろう。わたしの見る者はこれ以外のものではない。わたしの心はこれを望んでこがれる。

【バルバロ訳】

26 皮膚がこのようにきれぎれになっても、私はこの肉でながめるだろう。

27 ああ、幸せな私よ、この私自身が、他人ではなく私自身の目で見ると。腎は絶えなんばかりにあこがれる。

【尾山訳】

26 死んだあとだけでなく、この苦しみの中で神とお会いする。

27 私自身この目で神とお会いする。私のうちにある思いは、私のうちでこれを慕い求めてやまない。

●この箇所を観察すると、そこには絶え入るばかりのヨブの内なる思い、つまりヨブが心から慕い求めてやまない事柄が記されていることが分かります。その内容は、ヨブが自分自身の目で「私を贖う方」、すなわち「神」を見ることです。神を「見る」ということばが二度も記されています。いずれも「ハーザー」(הִזָּהַר)という動詞です。「ハーザー」は「見る、目を注ぐ、注視する、預言する、仰ぎ見る」と訳され、霊的な目で実際に見ることを意味します。多くの人たちにはそれは隠されています。特別に霊の目が開かれた人だけが、あるいは、特別に神に引き上げられた人だけがそれを見ることができのです。ですからヨブは「自分自身の目で神を見る」ことを、ことのほか幸いだと思っているのです。ちなみに、バルバロ訳は27節で「ああ、幸せな私よ」と訳しています。

●「神を見る」その時の状況は訳によってさまざまです。それは「アフル」(אָפֵּן)というヘブル語が「うしろ

に「あとに」と訳される場合もあれば、その元になっている動詞の「アー・ルレ」(רָחַץ)には「とどまる、ためらう」という意味があるためです。大きく、「後派」と「継続・保持派」の訳に分かれます。新改訳は「私の皮が、このようにはぎ取られた後、・・神を見る。」とあるようにヨブが死んだ後というニュアンスです。しかし新共同訳は「この皮膚が損なわれようとも・・わたしは神を仰ぎ見るであろう」とあり、今の苦しみの状態の中にあつてというニュアンスです。

●これは同時に、26節後半の「肉」(「バーサール」בָּשָׂר)とのかかわりにもかぶってきます。つまり神を見るのは、「肉を離れて」なのか、あるいは「肉のまま」(=肉から)なのかという具合に。しかしながら、原語の前置詞「ミン」(מִן)は、どちらにも解釈可能なのです。翻訳者は選択可能な意味からその一つを選ばなければなりませんから大変です。

最後に

●さて、ヨブの「私は知っている」(19章25節)というフレーズは、きわめて重要だと考えます。というのは、この「知る」というのは、伝統的な、智恵文学的な範疇の「知」ではないからです。むしろ、それを越えた神の知恵としての「知」だと考えられます。とすれば、19章25節は、やがて来られて地の上によみがえられるメシアを預言していると結論付けることが可能です。この方こそ、真に、ヨブの問題を解決することのできる唯一の希望です。神の御座において、天の法廷において、サタンの執拗な訴えがなされたとしても、キリストとその血潮を信じるすべての者にとって、「罪なき者」として神の法廷で弁護してくださる永遠の「贖い主」です。もし、ヨブ記のクライマックスと言われるこの部分でイエシュアのことがかかされていないという立場を取るならば、その解釈は正しい解釈とは言えません。なぜなら聖書は、イエシュアがメシアであることを証言している書だからです。ヨブ記とて例外ではないのです。

2014. 6.15